

小学校の音楽科授業における集団への指導に関わる一考察

辻 有里¹

要旨

本稿では小学校の音楽科の授業において、現行の教育課程や学級編成、児童の音楽科授業に対する意識等を整理した上で集団に対してどのような指導や工夫が行われているかについて先行研究を基に調べた。特に集団の形成や編成に関する取り組みについて着眼し考察した。

小学校における音楽科の授業の中では、小集団を含む集団での取り組みが行われており、児童同士の協働や、学級内の円滑な対人関係の重要性が指摘されている。児童同士の関係や、席順を含む集団の構成や編成の方法については、児童が様々な他児に関われるよう小集団の編成を一定期間毎に変える試みや、ソーシャルスキルの育成が音楽科授業の学習効果に影響していることが示されている。

また、ユニバーサルデザインの観点を取り入れた研究では、特別な支援の必要な児童だけでなく、学級全体の実態把握と支援が学習効果を高めている。今後の課題として、児童同士の関係や、教師と児童の関係、集団規模等の集団内要素を踏まえ、集団形成や編成が音楽の学びに与える影響についての実践研究が必要である。

キーワード 音楽 教育 小学校 集団 指導

1. 序文

音楽科の授業では、合奏や合唱をはじめ、複数の児童又はクラス全員で共に歌ったり、演奏したり、音楽づくりをしたりすることが多く、他の教科と比較すると、集団で行う音楽活動に音楽教育の特徴があると言える。また、音楽は音楽科の授業だけでなく学校行事等、様々な集団活動で取り入れられている。高倉は〈ともにまなぶ〉ことが公教育における音楽教育の意義であると述べている〔高倉，梶谷，阪井ほか，2016：44-57〕。

本稿では、小学校の音楽科の授業における集団に注目し、音楽科の授業における集団活動の位置づけや意味、教師による集団への指導がどのように行われているかを調べた。特に音楽科の授業において集団の形成や編成がどのように行われているかに着眼した。また、どのような集団への指導や集団形成が、集団の音楽活動における学習効果を高めるのか検討した。研究方法として、音楽科授業の実践研究や、児童や教師への音楽科授業に関わるアンケート調査を含む研究を中心とした先行研究を整理し考察を行なった。

¹ 短期大学部こども学専攻

2. 児童の音楽科授業に対する意識と学習の理解

音楽科授業における集団の在り方や指導について考える時、第一に学習の主体である児童の視点を踏まえることが重要であると考え。そこで児童を対象としたアンケート調査結果等を基に考察することとした。

平成 24 年度学習指導要領実施状況調査では、児童に対して、音楽の学習が好きかどうかの質問に対して、肯定的な回答の割合は 68.1%、「音楽の授業がどの程度わかりますか」という質問には、肯定的な回答が 66.1%であった〔国立教育政策研究所教育課程研究センター, 9〕。つまり、音楽科の授業に対して、多くの児童が肯定的な意見を持ち、内容も理解していると感じているが、一方で一定数の児童は、否定的な意見を持ち、内容が理解できていないと感じていることがわかる。

また、児童への質問紙調査とテスト調査の結果から、皆で「協力し学び合っている、こう表したいという願いや考えを持つようにしている、という意識を持っている児童は、表現領域の思考力・判断力・表現力にかかわる記述問題の通過率が高い傾向がある」ことがわかった〔国立教育政策研究所教育課程研究センター, 2-12〕。他児との集団での学びに肯定的な意見を持ち、自分の表現したいことが意識できる場合、音楽の表現に関わる学習も深まることが示唆されている。

松下は小学校で教えていた子どもが中学生になってからアンケート調査を行い、その中で中学生に小学生の時の音楽活動を振り返ってもらおうという方法で音楽教育の検討を行っている〔松下, 2016: 68-76〕。設問内容は、「小学校の音楽の授業で今でも心に残っていること、こんなことが勉強になったと思うこと」を自由記述で答える形式であった。

松下はアンケートの回答から、心に残った授業の要素として、楽器の学習、知識・技能が身に付いた実感、児童の主體的・協働的学習の三つを挙げている。また、活動が心に残った理由として、その活動が「楽しかった」からという回答が最も多く挙げられた。

この調査は対象者が調査実施者の教え子であることから、結果には偏りがあると考えられる。しかし、小学生にとっては現行の音楽の授業について、その場ではわからないことや意識化できないことが、後に振り返ることで感じられることもあると考えられる。したがって中学生を対象とした調査は、小学生への調査とは違う観点から小学校の音楽科授業を評価することができると考えられる。

伊藤は、音楽の授業の集団構成について、小学生 553 名にアンケートを実施した〔伊藤, 1998: 25-60〕。その中で、「一人」「友達と二人」「3、4人のグループ」「クラスのみみんな」「先生と二人」「先生とグループ」「先生とみんな」という7つの形態で、鑑賞、歌唱、演奏、創作、勉強の5つの活動に対し、どの程度「楽しい」と思うか尋ねている。ほとんどの児童が一人、二人よりもグループやみんな、又は先生とグループ、先生とみんな音楽活動を行った方が楽しいと感じていることが示された。

複数の児童へのアンケート調査の結果から、音楽科の授業に関する児童の感じ方、捉え

方は肯定的なものが多い反面、一様ではないことがわかる。また、児童にとって、音楽科の授業における集団での活動は重要な要素となることが推察された。

3. 学習指導要領に示された音楽科授業での集団活動

次に、国の教育課程の基準である小学校学習指導要領（平成 29 年告示）から、音楽科の授業における集団の位置付けを考えたい。学習指導要領では、音楽の目標を「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」を育成することと定めている〔文部科学省，2017：116-128〕。

具体的な三つの目標のうちの一つに「音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う」とある。また、小学校学習指導要領解説音楽編では、音楽に対する心情や感性、態度等を養うことは、「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性等の涵養」という教育目標に関連付けられ整理されている〔文部科学省，2017：18-19〕。

小学校学習指導要領では、音楽科の学びが、集団での音楽活動によって特徴付けられることに言及し、目標である「音楽活動の楽しさを体験する」ことに関し、「協働して音楽活動をする楽しさ」を感じることを全ての学年の音楽科の目標となっている。そして「協働して音楽活動をする楽しさ」とは「音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図りながら、友達と音楽表現をしたり音楽を味わって聴いたりする楽しさなど」であると示した。また、音楽科の学習内容についても、歌唱や器楽の活動で、互いの歌声や楽器の音を聴くこと、声や音を合わせる技能を身につけることが記されている。

これらの音楽科における目標や学習内容を、子供たちが「どのように学んだら良いのか」という学び方の視点として、小学校学習指導要領の総則においては「主体的・対話的で深い学び」が掲げられている〔奈須，2017：31〕〔文部科学省，2017：22〕。無藤によれば、「対話的な学び」とは、子供同士、子供と教師、子供と地域の人々等による様々な対話や学び合いを通して、子供が多様な表現や、様々な捉え方を知ることが含まれる〔無藤，2017：17〕。

以上のことから、音楽科の教育においては、児童同士がコミュニケーションを図りながら、友達と音楽を表現したり聴いたりする楽しさを体験することが重視され、それによって様々な力が培われることが教育課程の基準として示されている。そしてそれが音楽科の教育の成果として期待されていることがわかる。

4. 音楽科授業における集団の基本的要素

集団での学習の在り方を考える時、集団の大きさや構成員の特徴、構成員同士の関係等は基本的且つ重要な要素である。国で定められている小学校における一学級当たりの児童数の上限は、第 1 学年は 35 人、その他の学年は 40 人となっている〔電子政府の総合窓口

e-Gov]。小学校の児童数の平均は 23.3 人となっているが学校や地域により実態は異なると考えられる。そして授業の学習集団は、基本的には同年齢の児童の集団編制である。

音楽科授業における特徴の一つに音楽教師と児童との関係が挙げられる。小学校の音楽教師の立場は、学級担任、音楽専科、そして学級担任であると同時に同学年や他の学年の音楽を担当している教科担任の三つである。学級担任以外で教科などを主指導する教師が授業を担当する、いわゆる教科等担任制の割合は、全教科の中で音楽が最も多く、第 5 学年では 54.0%、第 6 学年では 55.6%である [文部科学省：4]。平成 24 年度小学校学習指導要領実施状況調査の教師質問紙調査結果(音楽)から、低学年時は学級担任が音楽科を担当することが多く、中学年から高学年になるに従い音楽専科の教師が教える割合が高くなっている傾向がある [国立教育政策研究所教育課程研究センター：1]。

教室環境も又、集団活動やその学習に大きく影響する要素の一つである。音楽科授業では、使用する教室も学級の教室の場合と、音楽室の場合がある。国立教育政策研究所による調査では、音楽教師に「ふだんの音楽の授業は、どこで行うことが多いですか」という質問をし、各選択肢の回答を選んだ教師の指導を受けている児童の割合として算出し、第 2 学年では普通教室を使用する場合は約 6 割と多く、第 4 学年以降は、8 割以上が音楽室を使用していることがわかった [国立教育政策研究所教育課程研究センター，15]。

このように、初等教育の音楽科の授業においては、音楽教師と児童の関係が一様ではなく、学習環境も使用する教室によって異なる。小学校の音楽科の授業における指導の在り方を検討する際、集団活動に影響するこれらの基本的な要素を踏まえることが必要であると考えられる。

5. 音楽科の授業における集団への指導

初等教育における音楽科授業では、様々な小集団を含む集団での取り組みが行われ、実践研究でその成果が検証されている。集団に着眼した音楽科の実践研究では、集団での音楽活動それ自体が児童にとって楽しい体験となるわけではなく、児童の主体性や児童同士の関わりが音楽活動を支えることを示している [権藤，2008：19-26] [高倉，梶谷，阪井ほか，2016：44-57]。また、児童が相互に関わり学習を深める教育として「協同学習」の実践や研究がなされてきている [田中，2015：74-81]。

音楽科授業における学級集団の形成、編成の実践例として、後藤の協同学習の実践研究が挙げられる。後藤は、音楽科の指導において協同学習が知識や技能の習得や、思考力・判断力・表現力を身につけることに効果的であることを示した [後藤，2012：68-75]。その中で、音楽科での協同学習を支える学習集団にとって「児童相互の円滑な人間関係や適切な関わりが必要不可欠」と指摘した。そして、児童相互の人間関係を育成する手段として、ソーシャルスキルトレーニングが有効であったと結論付けている。

後藤の実践では、音楽科の学びの基本となる学習集団づくりに着眼し、音楽科の授業時

間だけでなく、他の教科時間も同様に学習集団づくりを行なっている。二人組による学習では、1週間毎に席替えをすることで、児童が様々な他児とペアになって学べるように集団を構成している。また、4人のグループで活動する際は、グループメンバーの一人一人が明確な役割をもち、役割をローテーションするように学習が構成されている。後藤は学級内の対人関係を重視し、学級集団の育成が音楽科教育の成果に反映することを示している。

重森は、鑑賞の授業における集団での学びの意義に関するアクション・リサーチにおいて、3人の小集団での話し合い等による集団での学習効果について検討している〔重森, 2008: 84-96〕。児童の鑑賞能力の深化と学習への意欲向上の成果を挙げ、児童への事前事後アンケート調査と事例検討によりその成果を検証していた。重森は、集団での学びを生かした授業を行うには、子供の対話力を伸ばすための日常的指導と、子供の対話を深める教師の発問等についての研究が必要であると述べている。

後藤と重森の研究における共通点は、集団での音楽活動においては、児童同士の対話や関わりが必要であり、それを育むための日常的指導が有効であるという点である。古山と国府は小学生教師の考える「創造性」の特徴について、「音を介して他者と協働する中で育まれる」と捉えていることを述べ、「学校教育は、同年齢の児童を集団で指導する場であることが前提となっており、他者との良好な関係性の維持は教育上の重要なファクターでもある」と指摘している〔古山, 国府, 2016: 118-119〕。

結論として、音楽科の授業においては、学級内の円滑な対人関係が重要であり、その対人関係を築くためには日常的指導が有効であることがわかる。そして、授業外の時間だけでなく、音楽科の授業内においても、集団の編成を工夫することで児童同士の関わりを深めることができることを示している。

6. ユニバーサルデザインの視点を取り入れた実践研究

音楽科の授業において集団に対して働きかけを試みる際、集団の実態の把握は欠かすことができない。音楽科の学習指導案においては、集団の長所や児童ができて音楽行為に関わる記述が多い。その中で、児童のできるだけでなく、集団や個人の苦手なこと、まだできていないこと等の課題についても取り上げ、集団全体に働きかける指導として、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた実践がある。

阪井は、音楽科の授業における児童の学びに関して生じやすいつまずきを挙げ、ユニバーサルデザインに着眼している〔阪井, 2017: 35-47〕。阪井は、実態把握に基づくアプローチにより短期間で音楽科授業の改善が見られた例を挙げ、授業力、配慮の必要な児童の理解と対応、そして環境整備の3つを指導上の重要な点として指摘した。音楽科授業の実態把握として、児童の実態だけでなく、音楽室の机の有無や椅子の配置等の環境の把握を行い、教室環境の改善が授業改善に繋がることを示した。

阪井は、ユニバーサルデザインの観点から、4種類の音楽室のレイアウトを提案し、指導目標に合わせた椅子と机の配置を推奨している〔阪井，2018：44-45〕。増田もユニバーサルデザインの視点から音楽室の机の有無に関して着目し言及している〔増田，2019：32-35〕。阪井と増田は、机を必要とする児童の存在を指摘し、必要とする児童が机を使用できる環境作りについて述べている。

鑑賞の授業において、ユニバーサルデザインを取り入れ、曲想に関する表現を引き出すために、言葉だけでなく絵カードを用いて支援を行なった実践がある。新井と藤原の研究においては、まず鑑賞の授業における学級全体としての児童の実態と、特別な支援が必要と考えられる特定の児童4名の実態を把握している。そして、学級全体としての課題と、4名の児童それぞれの課題を挙げている〔新井，藤原，2015：146-147〕。特定の児童4名だけに課題があると考えられるのではなく、学級全体の課題も抽出したことで、より適切な集団把握に繋がったと考えられる。

視覚的支援として用いた絵カードは学級全体の児童に使用している。「あたたかな感じ」「とびはねるかんじ」と言った音楽を聴き感じたことを絵カードで示し、表出を助けている。また、「話し合いの視覚化」として、「話し合いシート」というものを作成している。このような視覚的支援により、特別な支援を要する児童への学習成果が見られたことに加え、学級全体についても効果的であったことが記載されている。特別な配慮が必要だと思われる子どもだけでなく、様々な子どもに寄り添う支援になっていると考えられる。

廣津は、第2学年の児童を対象とし「シンコペーテッド・クロック」を鑑賞する授業において、意見の交流や批評文を書く際の支援として、自由記述の用紙と選択肢を設けた用紙の2種類を作成し、全ての児童にどちらの用紙を使うか選択させた〔廣津，2019：90-91〕。記述につまずきが見られる特定の児童1名については、曲想について「ゆらゆらゆれるような感じ」といった言葉の選択肢があることで、児童自身が選択肢を選択できるだけでなく、それをヒントにして自分の言葉を使って記述する姿についても報告されていた。また、ワークシートを児童自身が選ぶことができることで、全ての児童が全項目を記述することができたと報告しており、適切な支援は多くの児童に対して効果的であると考えられる。

7. 総合考察及び今後の課題

音楽科の授業に関して、児童の多くは好きだと感じ、内容を理解できていると感じている一方、一定数の児童は音楽科の授業を好まず、内容の理解も不十分であると感じていた。ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業は、特別な支援が必要な児童に、適切な手立てや環境を提供するだけでなく、音楽科の授業内容の理解が十分にできていないと感じている児童への支援にもつながっているのではないかと考察される。

今後、特別な支援が必要である児童だけでなく、学級の児童全員の一人ひとりの実態把

握を行い、その指導の手立てと学習成果が検証されることで、集団への教師の指導が、どのような児童同士の関わりを生むのか検討できるのではないかと考える。

音楽科授業の中で、児童同士の関係や、席順を含む集団の構成や編成の方法に着眼した後藤の研究では、児童が様々な他児に関われるよう小集団の編成を一定期間毎に変える試みや、ソーシャルスキルの育成が、音楽科授業の学習効果に影響していることを検証していた。米持と村中は、広汎性発達障害児の小集団音楽活動への参加促進と指導者の位置取りについて、児童の前方から個別指導する場合と、後方から個別指導する場合を比較し、前方から個別指導をすると対象となっている児童には効果があるが、逆に他児へはマイナスの影響があることを報告している〔米持，村中，2011：157-170〕。

この研究は小学校低学年の障害のある児童を対象としており、音楽科の授業における実践ではないが、通常学級での音楽科授業にも示唆を与えるものであると考えられる。音楽科授業において、教師がどの集団に、どのタイミングで、どのような位置取りで、どのように指導するかによって、児童の学習体験は異なる。そして、教師が一つの小集団や個人へ働きかけることにより、それが他の集団や他児へも影響する。教師による集団や個人への指導や、その指導が集団へ与える影響に着眼し検討することが、音楽科授業での集団への指導法をより効果的なものにするために必要であると考えられる。

小学校の現場で音楽科を担当する教師は、学習集団づくりと音楽科授業の繋がりを感じていると思われる。音楽教師自身が学級担任をしているクラスでの音楽科授業と、他の教師が学級担任のクラスで行う音楽科授業では、児童との関係も異なり、児童や学級集団の実態把握のしやすさも異なるだろう。しかし立場の違いに関わらず、一定の教育成果を上げることが教師には求められていることから、児童と教師の関係や児童同士の関係に着眼した音楽科授業の研究は難しさが伴うかもしれない。

小学校の音楽科の授業では、教師の立場や教室環境等、集団内の児童同士の関係に影響を及ぼす要素は多い。それらの重要性に加えて、同年齢の児童によって構成される学級集団における児童の集団心理やその発達を踏まえた音楽科授業での指導法を模索することが今後の課題である。

結語

本稿では、初等教育における音楽科の授業において、集団の活動に対する指導について先行研究等を基に考察してきた。児童を対象とした複数のアンケート調査から児童にとって音楽科授業における集団活動の意味は大きいと推察された。集団形成や編成に着眼した研究では、席順を一週間ごとに変え、児童の円滑な対人関係を築くことが音楽科の授業での学びに役立つことが提案されていた。また、ユニバーサルデザインの視点から、支援を要する児童と学級全体の実態把握に基づき、絵カードを用いた視覚支援や適切な教室環境、手立ての選択肢が児童にあること等、効果的な指導方法が知見として蓄積されている。

しかし、音楽の学びにおける集団や協働の重要性が認識されている一方で、集団の基本的な要素である学級人数や席順、集団の隊形、児童と教師の関係や児童同士の関係に着目した研究は少ないように思われた。より児童の立場に立って集団に着目し、集団の形成や編成が児童の音楽体験や学びに与える影響を検証する実践や研究を進めていきたい。

引用文献

新井栞, 藤原志帆 (2015) : 小学校における授業のユニバーサルデザイン化 音楽鑑賞学習に焦点をあてて, 学校音楽教育研究, 19, 146-147.

伊藤正子 (1998) : 楽しい音楽の授業のための集団構成についての研究, 鈴木ゼミ研究紀要 (兵庫教育大学), 8, 25-60, <http://www.art.hyogo-u.ac.jp/hrsuzuki/students/aiai.pdf>

国立教育政策研究所 教育課程研究センター : 平成 24 年度学習指導要領実施状況調査 教科等別分析と改善点 (小学校音楽), 2-12.

国立教育政策研究所教育課程研究センター : 平成 24 年度小学校学習指導要領実施状況調査 教師質問紙調査結果(音楽), 1-15. https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shido_h24/01h24_25/05h24kyoushi_ongaku.pdf (最終アクセス日 2020 年 2 月 15 日)

後藤聡 (2012) : 学びをつくる指導法の改善 : 音楽科を中心とした協同学習の実践, 山形大学大学院教育実践研究科年報, 3, 68-75.

古山典子, 国府華子 (2016) : 小学校教師の考える「創造性」-質問紙調査より, 音楽を学ぶということ, 教育芸術社, 118-119

権藤敦子 (2008) 学校づくりと音楽科—協働を通して成長する教師力, 音楽教育実践ジャーナル 5 巻 2 号 p. 19-26 DOI https://doi.org/10.20614/jjomep.5.2_19

阪井恵 (2017) : 音楽授業のユニバーサルデザインに向けて — 音楽科の教師・研究者のための基本的な情報 —, 明星大学大学院 教育学研究科年報, 2, 35-47.

阪井恵, 酒井美恵子 (2018) : 音楽授業のユニバーサルデザイン はじめの一步, 明治図書, 44-45.

重森栄理 (2008) 鑑賞の授業における, 集団での学びの意義に関するアクション・リサーチ, 音楽教育実践ジャーナル, 6 (1), 84-96. DOI https://doi.org/10.20614/jjomep.6.1_84

高倉弘光, 梶谷祐子, 阪井恵, 石井ゆきこ (2016) 座談会 学校音楽で〈ともにまなぶ〉ということ, 音楽教育実践ジャーナル, 14, 44-57. DOI https://doi.org/10.20614/jjomep.14.0_44

田中里佳 (2015) 音楽科の学習を協同的な学習として位置づける試み —実践を通じたの提案, 音楽教育実践ジャーナル, 13-1, 74-81. DOI https://doi.org/10.20614/jjomep.13.1_74

電子政府の総合窓口 e-Gov：公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律(平成 29 年 5 月 17 日公布), https://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/detail?lawId=333AC0000000116 (最終アクセス日 2020 年 2 月 15 日)

奈須正裕編著 (2017) 平成 29 年度版小学校新学習指導要領ポイント総整理総則, 東洋館出版社, 31.

廣津友香 (2019) 授業のユニバーサルデザインの視点を取り入れた音楽科授業—鑑賞授業における学習支援—, 学校音楽教育実践論集 3(0), 90-91.

松下行馬 (2016) 子どもの心に残る音楽の授業の要件についての一考察—中学生へのアンケート調査の結果から, 音楽教育実践ジャーナル, 14, 68-76. DOI https://doi.org/10.20614/jjomep.14.0_68

無籐隆 (2017) 新学習指導要領等が果たす役割 (特別寄稿) [山下薫子 (編) 平成 29 年度版小学校新学習指導要領ポイント総整理音楽], 東洋館出版社, 東京都, 17.

文部科学省 (2017) : 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示), https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/09/05/1384661_4_3_2.pdf (最終アクセス日 2020 年 2 月 14 日)

文部科学省 (2017) : 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説音楽編

文部科学省 : 学習指導要領の基本的なこと, https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/index.htm (最終アクセス日 2020 年 2 月 15 日)

文部科学省 : 学校基本調査 令和元年度結果の概要 (初等中等教育機関、専修学校・各種学校), 6, https://www.mext.go.jp/content/20191220-mxt_chousa01-000003400_2.pdf (最終アクセス日 2020 年 2 月 15 日)

文部科学省 : 平成 30 年度公立小・中学校等における教育課程の編成・実施状況調査 調査結果の概要について, 4. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/04/10/1415063_1_1.pdf (最終アクセス日 2020 年 2 月 15 日)

米持早苗, 村中智彦 (2011) : 小集団指導における広汎性発達障害児の音楽活動への参加促進と指導者の位置取り, 特殊教育学研究, 49 -2, 157-170. DOI <https://doi.org/10.6033/tokkyou.49.157>

Aspects of Group Work and Student Interaction in Elementary School Music Education Classes

Yuri TSUJI

Summary

This study organizes music teaching methods and strategies which have been used to develop students' group work and increase students' interactions in music classes in Japan.

Many studies by music teachers and practitioners identifies importance of students' collaborative work for music learning and utilize group work especially in small groups from 2 to 4 students in music classes. One study reported that changing students' seats every week and social skills training helped students interact and learn in music classes.

Practical research of music education in elementary school from the aspect of universal design for learning address the importance of classroom arrangement including placement of desks and chairs. Assessment of students with special needs and of the class as a whole and identifying difficulties in music learning have been found as effective to facilitate music learning. Visual aids such as pictures in worksheets and choices of worksheets were also found helpful for children with and without special needs in music listening activities.

More research addressing music teaching skills and strategies based on an adequate assessment of students' group dynamics in the Japanese music class settings is necessary.

Key word music education elementary schools groups teaching